
Rose Garden

宝栄光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Rose Garden

【Nコード】

N1832I

【作者名】

宝栄光

【あらすじ】

少女が迷い込んだのは大きなお屋敷。

中世ヨーロッパを思わせるその洋館の中で出逢ったのは、執事だった。

執事の話聞いていくうちに少女はあることに気がついて……。果たして、少女と執事の関係は？

また、こことは離れた異国の地にて、別の物語があるらしい……。

その屋敷はとても大きく、白い（・・・）薔薇が咲き誇り、とても高貴な貴族が住んでいました。毎晩毎晩舞踏会やパーティーなどを開き、人々もまたその屋敷に招待されることはひとつの夢でした。屋敷の主は誰からでも愛されるような、優しい心の持ち主で、妻もそんな主をそのまま真似したかのような。そんな人でした。

そんなある日、屋敷は大騒ぎでした。二人の間に子どもが生まれたのです。瞳が大きく、一目見ただけで美人になりそうな、そんな女の子でした。

女の子は皆の愛情をたくさん受け、すくすくと成長していきました。

ギイイイイイ。大きく重い扉が開く音と共に、年頃の少女が顔を覗かせた。少女はあたりを見渡す。誰もいなかった。少女は不思議に思った。こんなに立派なお屋敷なのに、人が誰もいないなんて。彼女はどこをどうやってこの屋敷に辿り着いたのか分からない。

月光だけが頼りの夜、彼女は森の中を彷徨っていた。気がつけば森の中にいた。恐怖というものは無かった。少し歩くと視界が開けた。目に飛び込んだのは、丘の上に立つ中世ヨーロッパの屋敷をそのまま現代に移築したかのような。そんな立派で、幻想的な屋敷だった。屋敷の庭には真紅色の薔薇が咲き誇っており、降り注ぐ月光がまさに絵に描いたような風情を描いていた。

彼女は助けてもらおうと思った。これだけ薔薇が咲いているのだ。きっと屋敷の人が手入れしているに違いない。そう思ったからだ。しかし、彼女のその思いは外れた。時間が時間だけに皆寝静まっているということも考えられるが、果たして少女にはそうは考えられなかった。

ひとまず、夜を明かさしてもらおう。彼女は玄関正面の大きな階段に腰掛けると、月光差し込む大きな窓を見上げた。大きな白い満月と目が合った。彼女はどこかでこの景色を見たことがあると思っただが、彼女の家は普通の一軒家。それにこの屋敷にだって初めて来たのだ。それはただの『気』でしかないだろう。

「なにか御用ですか」

彼女は振り向いた。そこには二十代前半いや、二十四、五歳だろうか。顔立ちの整った、背の高い執事が立っていた。彼は片腕を胸に、そしてもう片方を動作にあわせて自分の胸の中へ隠しながら頭を下げた。いわゆる紳士礼というものだ。

彼女は答えた。

「道に迷って。夜が明けるまで居させてくれませんか」

執事は少し困り顔を見せたが、

「ええ、よろしいですよ」

と少女に告げた。彼女はお礼を言うと、「私の後について来てください」。そう言う執事に従い館を左へ進む。他よりも少し豪華な感じの扉を開くと、先ほど彼女が見たたくさんの真紅色の薔薇を望むことの出来る部屋が姿を現せた。

「どうぞ、ご自由にお使いください」

執事は先ほどと同じように紳士礼をすると部屋を後にした。

彼女は窓を開け、テラスに出た。涼しい風が彼女の頬を撫でる。

薔薇の庭の中、光る蝶がひらひら一匹飛んできた。少女は不審に思ったが、きつと月光の光の影響でそう見えるのだろうかと思得した。

童話の世界の中に遊びに来たような感じがして、彼女はうれしかった。彼女はまだ気がついていない。童話ほど残酷な物語は無いということ。

ヨーロッパで語られる童話は大抵がバッドエンドだ。例えば人魚姫。彼女はこの話の最期は王子様と人魚姫は結婚し幸せになると思っている。彼女が小さいころ読んだ童話にもそう書いてある。しかし実際は違う。それは最期の真を隠した虚の事実。執筆したアンデ

ルセンの原作は、人魚姫は王子と結ばれること無く、気づいてもらうことすらされず泡となり死んでしまう。彼女はそれを知らないのだ。だから純粹に心から喜ぶことが出来る。

しばらくして執事がまたやってきた。

「ご気分はどうですか？」

「ええ。大丈夫ですよ」

少女は聞いた。

「主の人に挨拶はしなくてもいいのですか？」

執事は言った。

「この館に主なんて居ませんよ」

少女は聞き返した。執事が居るのに主が居ないのはどうしてだろう。

「主は死んだのです。主も、その妻も、私以外の使用人も。全て。

私だけが生き残った」

少女は聞いてはいけないことを聞いてしまったと少し後ろめたくなった。それを見かねた執事が、結構ですよ。気になるのは当然です。と付け足しながら。

「今でも私は、亡き主が戻ってきてくださるのではないかとここで待ち続けているのです」

と。少女は思った。本当に主思いの執事なんだなと。そして、悲しくなった。もう、戻ってくることはない主を、ずっと一人で待ち続けているなんて。

少女は無理も承知で聞いてみた。それは、少女の利でもあり、執事の為でもあるような気がする。

「わたしでよければ一緒に住んでもかまいませんか？」

彼女は身を追われていた。彼女の家は貧しく、たくさんの借金をしていた。彼女は知らなかった。たまに来る借金取りはただの怖いおじさんでしかないと思っていた。一昨日の夜彼女の父が死んだ。

次の日母が消えた。何かおかしいと思い始めた。しかし、母が家を空けることは仕事上多くそこまで気にはしていなかった。そして今

日、借金取りが家を訪ねた。何も知らない少女は普通に家に招き入れた。少女は口を手で塞がれ、そのまま攫われた。怖かった。死を覚悟した。が、途中運よくロープが切れ借金取りの目を盗み逃げ出すことに成功した。そして、この屋敷に辿り着き、執事に出逢った。借金取りに誘拐された時、少女は借金取りから聞かされた。父は母に殺され、母は金持ちの愛人の家へ行き、借金の肩代わりにわたしを売ったのだと。

だから少女は、別に執事が構わないのならここに住むのも悪くないと思った。童話では最期はハッピーエンドだから、自分は童話の折り返し地点に立っているのだと。それに、ここまではさすがに借金取りも追ってこないだろうという安易な考えもあった。ここが、この世のどこにも存在しない特別な場所だと思ったから。

執事は流し目で少女を見つめると、

「……そのことについては保留ということでもいいですか？」

少女が悲しそうな顔を見ると、執事は慌てたようにつけたした。

「いえ、私としては全く問題ありません。見たところ誰かに追われているようですし、ここに居るのが安全でしょう。しかし、この屋敷に住むとなると、この話だけはさせて頂きたいのです。あなたがこの屋敷の一員になるのなら、この屋敷に起こった過去を知っておいて欲しい。ただ、それだけです」

執事は、少女に「少し、残酷な出来事でした。それでも、あなたは聞けますか？」と、同意を求める。少女が、「大丈夫だと思います」と返したのを確認すると、執事は、少女が空けたテラスから手が届く範囲の薔薇を一本摘み、少女に手渡した。

「この薔薇がどうしてこんなにも真っ赤なのか、知っていますか？」

執事は尋ねた。少女は。

「赤い薔薇だから……。じゃないの？」

純粹にそう答えた。そもそも赤い薔薇の理由などその薔薇の種類が赤いからという理由だけで、それ以外は人工的な色水を吸わせて

無理やり着色させた白薔薇しかない。しかし、ここの薔薇はそんなことでは到底表すことのできない鮮やかな色をしていた。

「先ほど主や使用人は皆死んだ。と、お話ししましたよね？」

執事は少女に確認の意を取った。少女はこくりと頷くと執事は続けた。

「主や使用人は殺されたのですよ。それはもう語るに語れない有様でした。首や手首や心臓や。血がより多く出る急所。全員、そこばかりが狙われていました。ですから、その時、この屋敷は血の海と化しました。当時この屋敷は白薔薇で有名だったのですが薔薇はその者たちの血を吸ってしまったのです。それ以来この薔薇はこのような濃い赤の薔薇になったというわけです」

少女は怖くなった。執事の言うとおり、確かに残酷なことだった。血の気が引き、少しくらつと意識が飛びかけたが、執事がとっさに彼女の身体を支え、彼女は倒れることはなかった。

自分がさっきまで綺麗な。幻想的だ。と思っていた薔薇は殺された人たちの血をたくさん吸ってこのような色になったのか。そう思うと急にこの薔薇が怖くなったのだ。急いでテラスに通じる扉を閉める。いつの間にか光る蝶は三匹に増えており、まるで行き場を失った魂のようにひらひら漂っていた。

執事はそれに気がついたのか、
「あの蝶、不思議でしょう？ 近づかないほうがいいですよ。殺されますから」

それは、彼なりの忠告だったが、笑顔で言った彼の言葉は少女の恐怖心を煽るだけだった。

少女はますますその窓から遠ざかった。自分が先ほど捕まえようとしていた蝶が殺人蝶だなんて。

「あの蝶はですね、今もなお彷徨える者の魂の化身なんですよ。自分が殺されたことが分からず、またある者は殺されたという恨みを持って未だ現世に残っています。もっとも、そんな蝶はほんの数匹ですがね」

執事は薄っぺらい笑みを浮かべた。実際執事は、その蝶によって客人が殺されるのを目の当たりにしたのだという。それは蝶とは思えないひとつの光のように。光源で肉を切るかのように客人の周りを回り、気がつくとも客人の姿は無く、血の出ない肉片がたくさん転がっていたという。人の体は光速で斬ると表面は光沢を帯び、血は出ないのだ。あまりの摩擦に血管等が瞬時に融け、塞がる。というのが一般論だ。

「そんな不思議なお屋敷にあなた一人で？」

「ええ。主の帰りを待っているんです」

執事は紅茶を持ってきますのでしばらくお待ちください。そう告げ部屋を後にした。

「窓を開けなければ蝶は何もしてきませんから大丈夫ですよ」
そう付けたし。

一人にされるのは怖かったが、仕方なく少女は部屋で待つこととした。しかし、彼女の恐怖心が彼女をじっとなどさせるわけがなく、部屋を詮索しだした。すると、ベッドの下から一枚の絵が出てきた。それは、十七歳ほどのドレスを着た少女とあの執事。二人の絵だった。少女は執事に寄り添うように座っており、執事はそんな少女を優しく抱き抱えるように彼女の肩に手を伸ばしている。ただの絵の構図かもしれないが、少女には絵の中の執事と少女の関係は、特別なものだという事しか頭になかった。

額縁の裏を見ると一七五九年 デイオ&マーシャ。そう記されてあった。彼女は驚愕した。最初はこの絵の人と似ているだけだよ。そう思った。

「失礼いたします」

執事は紅茶を持って部屋に戻ってきた。少女は紅茶には口をつけない。また、執事もつけなかった。

「……失礼ですが、主に娘さんは居ましたか？」

執事は、

「居ましたよ。それはもうとてもかわいくて。マーシャって言う名

前なのですが、彼女も亡くなって……」

彼女は気が遠くなるのを感じた。最後に確認の意として執事の名前を問う。

「私の名前は『ディオ』と申します。あなたのお名前は？」

少女は泣きたくなるのを堪えながら言った。

「サーシャ」

と。絵の中の少女と名前が似ているのは偶然か。それとも必然か。彼女はそれからこの館からどうやって抜け出そうかと考えた。この館はわたしが立ち入ってはいけない屋敷。ここに居ては自分は殺される。殺人蝶はこの執事の飼いだねなのか。

そしてやっと彼女は気がついた。童話はハッピーエンドではないのだと。わたしは、これまでに無い、童話の主人公に選ばれたのだと。

「……実は、」

執事がもの重そうに口を開いた。わたしがここはわたしが居てはいけない場所だと気付いたことがバレればきっと殺される。直感した少女、サーシャは、

「何でしょう？」

とあくまでも平然を装った。果たしてそれがいつまで持つのだろうか。

「主や使用人を殺したのはお嬢様、マーシャ様なのです」

執事は溜息をつき、少女は聞き返した。

「え？」

「私はマーシャ様が十歳の時、マーシャ様の専属執事としてこの屋敷に雇われました。そしていつしか私はマーシャ様を。マーシャ様は私を。互いに互いが愛するようになったのです。しかし、それは執事とお嬢様。禁断の愛。結ばれることは無いと分かっていた。しかし、私とお嬢様は互いにその気持ち捨てられなかった。そして、とうとう我が主にそのことが知られてしまった。私はその日を境に屋敷から出て行くようにと言われた。お嬢様は許婚としか結婚が出

来ないという罰則が与えられた。その日の夜、お嬢様は我が父である主を殺し、我が母である奥様を殺した。次々に使用人を殺して回った。お嬢様は皆を殺して、最後に私を殺して、そして自分も死ぬつもりだった……」

「殺してって？」

少女が聞き返した。ただ、本当に。純粹に。彼が生きているのが信じられなかった。純粹に考えても、複雑に考えても、今、執事が生きていることは絶対と言っていていいほど無いのだ。でも、サーシャは、今は本当に彼が生きているんだとも思った。その二つの疑問が頭の中を渦巻き、葛藤し、答えが出る頃にはいつしか恐怖はなくなっていた。同情の念が勝っていた。

「殺せなかったのですよ。私のことを。お嬢様は。お嬢様は言いました。『やっぱりわたしにはあなたを殺せない。大好きな人を殺すことが出来ない』と。彼女は自分が確実に死ねるように毒を飲んでいました。お嬢様が私を殺めることができないのなら、私はお嬢様と同じように、自ら死を選ぼうと思いました。どうしてお嬢様がこのようなことをしたのか、考えずに分かります。しかし、朦朧とする意識の中、お嬢様は私に告げたのです。『生まれ変わって逢いに来るから。それまでここでずっと待ってて……』と。それが私が聞いたお嬢様の最後の声でした」

執事ディオはがっくりと首を項垂れた。サーシャは、

「あなたが待っているのって、主なんかじゃなくて、……そのお嬢様じゃないの？」

自然に涙が溢れていた。どうして涙が溢れるのだろう。サーシャは自分でも分からなかった。でもそれはきっと、ディオたちの運命があまりにも儂く、悲しいものだったからだろう。この人は好きな人の為に二百五十年もこの屋敷で一人待っていたのだ。待ち続けたのだ。そう考えると、彼女は感情を抑えることが出来なかった。「どうして、あなたが泣く必要がある？ あなたには何も関係ないのに」

ディオは少し戸惑った。自分の身に起こった過去を語り、彼女が泣くとは思っていなかったからだ。

「ううん。でも、なぜか涙が溢れてきちゃって。あなたは本当に強い人だよ……」

少女の涙は止まらなかった。ディオはこんな時お嬢様なら抱きしめてあげれば泣き止んだということを思い出した。初対面の人に失礼かと思ったが、そうすることにした。

ディオの腕の中に埋もれた少女は次第に涙は止まっていった。そして同時にある記憶が蘇る。この感覚……、懐かしい。勿論、ディオと逢うのは今日が初めて。しかしサーシャは以前も涙が溢れた時、彼が優しく抱きしめてくれたことのあるような、そんな気がしていた。

彼の胸の中で彼女はここに辿り着いたのは偶然ではなく、必然だと言うことが分かった。それは、二百五十年前の約束を守る為。そう、わたしは、わたしはこの家のお嬢様。アートナリア・マーシャだったのだ。毎晩毎晩舞踏会やパーティーを開き、白い薔薇で有名だったこの屋敷の一人娘だということを。そして、ディオという執事に恋をしたということ。最期にその執事をお願いしたということ。わたしは、アートナリア・マーシャの生まれ変わりなんだと。マーシャ、サーシャ。名前が似ているのは偶然ではなく、おそらく必然だったのだろう。

「あなたの名前はシエコ・ディオ。あなたの右肩には薔薇模様の黒子がある」

目の前の少女が急に言うものだからディオは驚いた。シエコという姓は名乗っていないし、右肩の薔薇黒子はお嬢様しか知らないはず。逆にディオはマーシャの左肩に薔薇の黒子があることを知っていた。

「失礼ですが、あなたの左肩に薔薇模様の黒子は……」

サーシャは何も言わず左肩を見せた。確かに薔薇の黒子が彼女の左肩にはあった。

たったそれだけだったが、ディオは確信した。この少女はお嬢様、アーナトリア・マーシャだと。

「……お嬢様？」

「何？ デイオくん」

ディオくん。彼のことをわたしはそう読んでいた。何か懐かしい。二人の間を記憶という風が吹き抜ける。

マーシャが十歳のころ当時十七歳だったディオに出会う。当時のディオはとてもシャイな性格で、マーシャと話すのでさえままならなかった。次第にマーシャとも打ち解け、さらに仕事にも慣れ彼は屋敷でも一、二を争うほどの執事となった。一方でマーシャは才色兼備という代名詞がもつともふさわしい少女へと成長していった。彼女は舞踏会ではピアノを演奏し、パーティでは歌を歌った。主の自慢の娘だった。

そんな彼らは互いに互いを意識する存在となった。マーシャが十五歳のころだった。ディオはマーシャを愛した。それはいけない恋だと分かっていた。

そして、二年後、ついに二人の関係は裂かれた。マーシャは気が落ち着かなかった。両親よりも何よりも信頼、愛するのはディオになっていた。そんなディオが目の前から消えるのが怖かった。だから彼女はそんなことは関係ないところへ行こうとした。だが、ただ、そこに行くのでは気が治まらない。皆を連れて行こうと思った。だから、殺した。たくさん人を殺した。ディオだけ殺せなかった。最期に自分が死んだ。

サーシャは再びディオの胸の中に蹲った。涙が溢れてきた。それは彼の腕の中でもとまることはなかった。

「約束を……覚えてくれてて、ありがとう」

「そんな……。私はただあなたに逢いたいと、ずっと思っていただけですよ。それに、お嬢様の願いです。それを叶えるのが執事の仕事でしょう？」

そして、二人は何か誘われるかのようにゆっくりと目を閉じた。

翌日、サーシャを探していた借金取りが朽ち果てた中世ヨーロッパの屋敷の中で、燕尾服を着、白骨化した死体の中に嬉しそうに蹲るようにして眠るサーシャの姿を発見した。そして、サーシャは二度と起きてくることがなかった。

その屋敷自慢の薔薇の庭はもうそれとは呼べない代物になっていたが、そこに咲く一輪の赤い薔薇を見つけることは誰にも出来なかった。

その屋敷はとても大きく、赤い（・・・）薔薇が咲き誇り、とても高貴な貴族が住んでいました。毎晩毎晩舞踏会やパーティーなどを開き、人々もまたその屋敷に招待されることはひとつの夢でした。

屋敷の主は誰からでも愛されるような、優しい心の持ち主で、妻もそんな主をそのまま真似したかのような。そんな人でした。

そんなある日、屋敷は大騒ぎでした。二人の間に子どもが生まれたのです。瞳が大きく、一目見ただけで美人になりそうな、そんな女の子でした。

女の子は皆の愛情をたくさん受け、すくすくと成長していきました……。

・ b e g i n n i n g ・ (後書き)

はじめまして。宝ほうえいひかる栄光と申します。

この作品がこのサイトでの初投稿ということになりました。

実はこの作品、絵師さまである、糸神縁さまの要望により執筆した作品で、一話完結タイプ（場合によっちゃあ、続いたりする）の連載ものです。

如何でしょうか？ さて、薔薇庭序章の物語ということで、次の作品も見ただければ幸いです。

また、サイト運営を行っておりますので、よろしければそちらも是非ご覧ください。

Y A H O O r G o o g l e で「夢幻幻想卿」あるいは「宝栄光」で検索！

・ C i e c c o ・ (前書き)

その男は一言で言うと不老者だった。

本当の始まりはここからあった。

二人の男の出会い。それが、R o s e G a r d e n 幻想の始まり
だったのかもしれない…。

その男は一言で言うところ放浪者だった。名前は知らない。ただ、誰かがこう呼んでいた。デユオと。

生まれて二十年デユオはまともな家に住んだことがない。気が付けば彼は外に居た。彼がまだ赤ん坊の頃だ。

三歳までどこかの教会で育てられた。

その教会もある日火事になった。燃える炎の勢いを彼は覚えていた。中に自分と同じような境遇にあった友達と、とてもやさしかった神父さんがまだ居たということ。彼は覚えていた。それは子どもが起きてはいけけない時間。深夜か早朝か。それは未だに分からない。彼はその日眠れなかった。勉強の時間を彼は全てお昼寝に当てた。掃除の時間は誰にも見つからないような場所でこっそりサボっている。と次第に眠れなくなった。

食事のあとみんなが遊んでいる時彼は眠った。とりあえず眠かったから本能がままに眠った。

さすれば彼は本来寝る時間である夜に眠れなくなった。神父さんにいつも言われていた。夜遅くまで起きてはいけません。

彼は夜に興味を持った。そう言われると逆に起きていたいと思っただ。今日なら大丈夫に違いない。彼は誰にも見つからないようにベッドから抜け出した。

それは彼にとってすばらしいものだった。空には星が煌々と輝き、木も、草も、花も、土も、闇によって黒く染められ、また、彼も闇に染められていた。怖いなんて思わなかった。それは、赤ん坊の頃幾日か外で過ごしていたからかもしれない。

それでもやはり三歳児。彼は呼びかけても触ってみても反応しない黒い木や、草や、花や、土が面白くなってきた。外で駆け回っているとまた眠れなくなった。教会に戻ろう。そう思った。

彼は迷子だった。どこからどう来たのか分からなかった。でも彼は泣かなかった。迷子になったら灯りのあるほうを目指せばいいのだよ。神父さんはそう言っていた。

昼間迷子になったらどうするのだろうか。彼は幼いながらもその話を聞いていた。その話が役に立つなんて。人の話を聞くことは大切なんだな。

彼は改めて思った。

遠くにとても明るい光を見つけることができた。

彼はその光を目指して歩いた。近くまで来てこの光は炎の光だということの方が分かった。その光に照らされて人がたくさん居るのが分かった。

みんな、迷子なのだろう。

彼は少しうれしくなった。本当は出歩いてはいけないこの時間に自分と同じような人間がたくさん居たから。

でも、その炎に近づくにつれてその影は大人だということに気がついて、また少し肩を落とした。一人の大人がデュオに気がつき、かけて来た。

教会の子どもたちはその教会の証として右太腿裏にクロスの刺青がある。それは大人になるにつれて薄れていくという優れものだ。

大人はそれを確認すると叫んだ。

「生存者が居るぞ！」

と。彼は意味が分からなかった。生存者という難しい言葉を使われても困る。でも彼はそれを言わなかった。神父さん以外の大人は少し怖かった。

大人に抱えられるがまま、その燃える炎を眺めた。しばらく眺めているとそれは建物なのだと気がついた。

へえ建物でも燃えるんだ。

デュオは感心した。眠さなんてどこかに行っていた。後にデュオは目を見開くこととなる。

燃えていた建物。それは、デュオの居た教会そのものでしかなか

ったからだ。暗闇に一人でも泣かなかった彼の頬に涙が流れた。怖いのではない。悲しいのだ。何が悲しいかは分からない。それでも彼は悲しかったから泣いた。彼は直感したのだ。

もう二度と友達や神父さんには会えないのだ。と。

翌日の昼過ぎ火はようやく収まった。それは見るに耐えない光景だった。デュオはまだ泣いていた。

大人たちが必死にあやしたがデュオは泣き止むことはなかった。言いつけを守らなかつたから、みんなは死んでしまったのだ。彼の胸にはそんな罪悪感で一杯だった。

後で聞かされた話だが、それは放火だったのらしい。犯人は最初から教会の子どもたちを殺すために火をつけたのだ。彼が二十歳の今、その犯人は居ない。

犯人の判決は公開処刑。十四歳のとき興味本位で集まった野次馬度もの最前列にデュオは呼ばれた。そして、なにやら赤い旗を渡された。

処刑官は言った。

「これは血の赤です」

デュオは旗を振るのを躊躇った。これを振ると犯人は射殺されるのだ。また、自分のせいで人が死ぬのか。

デュオは迷った。教会が燃えた後、彼は違う擁護施設へと移された。その館長は神父さんと打って変わってとても意地悪な人だった。何かいやなことがあると手当たり次第に施設の子どもを殴った。自分好みの女の子は毎晩部屋に呼び、やってはいけないことをした。断れば服を脱がされ表に出された。女の子からすればどちらも酷なことだろう。

自分好みじゃない女の子には身の回りの世話をさせた。掃除洗濯家事。本来館長がやらなくてはいけない仕事を全てその女の子に任せた。少しでも気に触ることがあると、その女の子を連れて館長は出て行った。その後、その女の子は館長とは帰ってこない。その時館長のポケットはいつもお金で一杯だった。

男の子は全ての力仕事を任せられた。一日十二時間以上は動き回った。それなのに食事はパン一切れ。動けなくなると館長はその子連れで山へ行った。不気味な笑みを浮かべる館長の右手にはお金が握られていた。

ここにいる皆が館長のことが嫌いだった。死ねばいいのに。そう思っていた。でも、それを口にするのと殺されたり奴隷として売られたりすることが分かっていて。だから誰もそのことを口にしなかった。

デュオもその例外ではなかった。あるときデュオはフォークを落としてしまったことがある。館長のギロツとした目がデュオを捕らえた。デュオはとつさに落としたフォークを投げた。鈍い音と共に館長の右目にそれは刺さっていた。

デュオは怖くなった。殴られるだけではすまないと思った。……いや、それもいいか。デュオはこのとき一度人生を諦めた。

しかし、デュオはしかと見た。館長の胸を細長い鉄の棒が突き抜けているのを。

それは館長がいつも大事にしていたサーブル剣だった。

それを抜き取ると傷口からはある一定の周期をおいてまるで何かに押し出されるかのように血が溢れている。館長は胸を押さえ、振り向き、そのまま倒れこみ、もう動くことはなかった。

自由になった館内は大騒ぎだった。ここに残るもの。出て行くもの。デュオは荷物をまとめて出て行くことを決意した。

しかし、彼らの考えは館長の周りに溢れる赤い液体のように生ぬるいものだった。

デュオは施設を後にすると、しばらくあてもなく歩いた。途中、ものすごい量の車が来るのが分かった。本能でそれらから隠れる。数秒後、パンという乾いた音が山中広がった。

デュオは銃というものを生まれてはじめて見た。

それは、次々に子どもたちに当たり、子どもたちは動かなかった。デュオは運よく助かった。それは地獄の始まりだった。

それからデュオは帰る家も無く、若くして浮浪者となった。

ある日デュオは追われていた。仕事をしくじったのだ。デュオが引き受ける仕事。それはいつも死と隣り合わせの危険なもの。しかし彼は金欲しさにその仕事を続けていた。料金は百フォルツから五千万フォルツまで。その金額は仕事の内容によって変わる。彼の仕事は『何でも屋』だった。

依頼主が草を抜けといたら草を抜いた。赤ちゃんの世話をしているといたら赤ちゃんの世話をした。人を殺してと言ったら……人を殺した。もっぱら彼はそれが仕事のメインとなっていた。もう、『何でも屋』ではないただの『殺し屋』だ。

彼はこの仕事が嫌だった。生きていくためには仕方が無いことだった。だから彼は続けた。彼はその世界ではかなり有名になった。

そんな時彼に舞い込んできたのが、護衛の仕事だった。『殺し屋』が『殺し屋』狙われている人を守る。彼は少し新鮮な感じがした。彼は深く考えず引き受けた。失敗だった。

『殺し屋』は一人だと考えていた。しかし、それは『殺し屋集団』だった。デュオは依頼主の屋敷の中で必死に抵抗した。結局彼は護衛のために人を殺した。

はじめは彼が優勢だった。次第に彼の勢いは衰えてきた。背後から至近距離で狙われる。彼は生まれながらにして授かった脅威の身体能力を駆使し、とっさにそれを避ける。気がつけば四方八方敵だらけ。デュオの背後に隠れていた依頼主はもうすでに死んでいた。仕事失敗である。

彼は思った。殺し屋集団を雇った者はそこまでしてこの依頼主を殺したかったのか。彼はその者にどんな恨みをもたれていたのだろうか……と。

銃弾をかわしつつ煙幕で包围網を突破すると彼は森のほうへ逃げた。森の中なら一に多勢でもやり合えるだろうか。あわよくば逃げ切ることも可能なのではないかと思う。あの、日のように。

しかし彼の持つ銃には残っている弾は少なかった。多くて五。少なくて一というところだろう。できるだけ無駄な戦闘は避け、万が一のために貴重な弾は残しておくなければならぬ。
痛っ。

先ほどの戦闘でだろう。彼の右足からは血が吹き出ていた。冷静を取り戻した今、この傷は彼にとって痛手だろう。どうせなら気付かずにいれたらよかったのに。感覚のない右足を引きずりながら道なき道を進む。後ろからは追っ手の声が聞こえる。

彼は逃げた。しかしそれももうお終いのようだ。彼の目にまばゆい一筋の光が当たるのを感じた。それは殺し屋集団の自分を探すための灯りだった。たくさんの殺し屋が彼に向かって発砲する。木を盾にそれをかわすも、視界が開けるのを彼は感じた。崖だ。深さはどれくらいなのか分からない。後方に敵。前方に崖。彼はいわゆる死への境地へと誘われたのだ。

殺されるくらいなら、自分で死のう。

それが彼の考えだった。彼は道なき場所へ一歩踏み出した。一瞬ふわっとした浮遊感を味わい、重力に身を引き寄せられる。人生最後の大ジャンプ。彼は漆黒の闇へ消えていった。

なんだ？ あれ？

デイオは水汲みの帰りに何かが流れてくるのを見た。
人？

丸太に引つかかるようにして川の上流から人が流れてくるのだ。デイオは慌てて川に入り、息を確認する。その男は足に怪我をしているようで、傷口からは血が流れ続けていた。デイオは自分の着ていた燕尾服の袖を破ると傷口に巻いた。彼を背負い自分の家に運ぶ。彼の家は二つの丘のちょうど間にあり、それぞれの丘の上には赤と白。それぞれ色の異なった薔薇の有名なお屋敷があったが彼はその屋敷に行ったことは無い。

自分が知っているだけの治療を施し彼は様子を見た。看病は三日

三晩続き、四日目の朝、その男は気がついた。

「……ここは……？」

傷口が傷んだ。そうか。俺はあの日崖から飛び降りて……。デュオだ。デュオは自分が生きていることにまだ信じられず、そして、生きている喜びを同時に感じた。

「目が覚めましたか？」

ディオがデュオに気付き言葉をかける。デュオは「傷口が痛みますが……。大丈夫ですよ」と返す。

それが二人の出会いだった。

しばらくの間デュオはディオの家に世話になることとなった。そして、知ったことがある。ディオは執事だということ。しかし執事といえど、特定の主を持たない雇われ執事のような。でも、デュオは知っている。デュオはこの街の執事の評判ですつと一番だということ。

「ディオはどうして特定の主を持たないのだ？ そのほうがずっと多くのお金を得られるろうに」

「私は自ら私の主にふさわしいと思った方にのみわが主と認めることにしています。いろんな家に行って執事の仕事をして回るのは主探しのため」

ディオは今日も仕事なのだろうか。燕尾服を羽織、

「まだ傷口が塞がっていないんですから、安静にしておくですよ」デュオにそう告げると出て行った。ディオが出て行ってからデュオは考えた。ずっとディオには迷惑をかけられない。いずれこの家も出なければならぬだろう。ならば俺は何をする？ また何でも屋か？

その日の夜、ディオが帰宅するとデュオは彼に一枚の紙を渡した。そこには義兄弟契書と手書きとても質素な契約文が書かれてあった。当然ディオは聞き返す。

「何ですか？ これは」

デュオは媚びるようにディオに縋るように言った。

「見てのとおり義兄弟契約書だ。俺は、数日ここに住まわせてもらってディオという一人の執事に惚れた。俺もあなたのような執事になりたいと思った」

「たしか、あなた何でも屋をしていて、仕事に失敗して怪我を負ったと言っていましたよね？ 執事にはそれが許されません。執事たるもの我が命よりも主の命が大事。自分の命は二の次です。あなたにはとてもできない」

デュオがはじめてみたディオの否定だった。

「だ、大丈夫だ。あれはたまたま失敗してしまっただけで……」

「言い訳はいりません」

その日ディオは一言もデュオとは口をきかなかった。少し言い過ぎたかな。とは思った。が、執事の仕事が死と危険合わせなのは当然のこと。時には身を呈してでも主を守らねばならない時がある。単に彼はデュオが嫌いなのではなく、嫌なのだ。デュオが執事になることが。そして 死んでいくことが。

時も経ち、初夏が近づいた五月のある日、ディオは赤い薔薇のアートナリア家の雇われ執事としてパーティーに赴くこととなった。アートナリア家。それはディオの家の両隣にある丘の上の両家。その執事として呼ばれることは、執事の中で誇るべきことだった。彼にとっては近くて遠い存在。それが一番よく似合う両家だろう。今日はそのうちの赤い薔薇のアートナリアに呼ばれた。

また、同時にデュオもディオに内緒で執事の仕事をしていた。ディオに比べればそれはまだまだ比にならないが、それでも彼の噂は街でもちらほらされるようになった。

そしてまた彼も赤い薔薇のアートナリア家主催のパーティーへ小金持ちの雇われ執事として赴くこととなった。

ディオもデュオも互いが互いパーティーに出席していることは知らない。乾杯の合図がされて後、彼らは互いの存在に気がついた。最初はデュオがディオに気がついた。その後ディオがデュオに。最

初に話しかけたのはディオだった。

「デュオ、どうしてここに？　そしてその服は？」

聞いてみたが彼には大体わかった。彼の耳にも最近現れた若い執事の噂は耳に入っていた。

「俺はあなたと同じような執事になりたいんだ」

デュオは言った。ディオは頭を悩ませた。もし彼がこのまま執事を超えるというのなら、彼には家から出て行ってもらおう。そうも考えた。ディオの家計は代々執事として栄えてきた。そして皆、主を守るために死んでいった。ある日彼はまた、新しい家族ができた。それがデュオだった。彼が義兄弟契書を出してきたときはうれしかった。ただ、執事になる。とさえ言っていなければ彼もシエコ家の一員として楽しい日々が送れていただろう。

家族が死んでいくのはもう、嫌だった。まして、ここにたどり着いた理由が主の護衛失敗とあれば彼の頭には、執事＝死というイメージがどうしても離れなかった。

「もし、このまま執事を超えるなら、今すぐ家から出て行ってほしい」

それはデュオにとって衝撃的なものだった。自分が執事になることを認めてくれないのは自分に執事の経験が無いからだと思いついでいたからである。だから彼は多くの下積みを積んできたのである。「でも……」

彼が言い終わると同時にその前か。会場内は銃声に包まれた。狙われたのは白薔薇のアートナリアのお嬢様。その横で執事かSPか。男が頭から血を流し床に倒れた。会場内は瞬時にしてパニックになった。ディオは赤薔薇のアートナリアのお嬢様の元へと走る。白薔薇のアートナリアのお嬢様が狙われたということは、こちらも狙われるということも十分考えられること。ディオの頭は彼女を守る。ただ、それ一色しかなかった。誰も今狙われている白薔薇のお嬢様を助けようとはしない。下級の執事となると主よりも先に逃げ出している者もいた。

が、その中でただ一人白薔薇のお嬢様の元へ走る執事の姿を見た。デュオだ。彼は燕尾服を風に揺らしながら彼女を抱くようにテーブルの下に潜り込む。同時にまた発砲音が聞こえ、先ほど白薔薇のお嬢様の頭のあつた箇所を打ち抜いた。あと一秒でも遅ければ彼女の命は無かつたと思われる。

デュオは白薔薇のお嬢様の命を救つたというのか？

デュオの視線はデュオに釘付けになつた。

デュオは白薔薇のお嬢様を机の中に隠れているように指示すると、皿の上においてあつたナイフを手取る。もうパーティーホールには自分たちしか残っていない。だとしてもこの状況で何ができるというのか。デュオは辺りを見渡す。どこにも犯人の姿を確認することができない。適当にナイフを投げて犯人に当たるとは到底思わない。それともデュオには犯人の姿は見えているのだろうか。デュオはデュオの行動を目で追う。デュオはナイフをシャンデリアめがけて投げる。それも綺麗に電気回線のコードのみを切断し、パーティーホールに二十個ほどあつたシャンデリアはすべてその灯りを消した。

それと同時にデュオは白薔薇のお嬢様の背中に赤い点が描かれているのを見た。彼はとつさに彼女を引き寄せる。銃弾が彼女のほんの数センチ横を飛んでいった。これは……スナイパーライフルスコップのレーザー標準……？ デュオはそのときなぜデュオが部屋を暗くしたのかを察した。その行動の真意はただ一つ。犯人の居場所を特定すること。付け加え、狙われにくくすること。

デュオは暗闇の中を飛び出した。向かいの時計塔。おそらく犯人はそこから狙っているはず。デュオは何の武器も持たずに一人で時計台へ昇つた。

一方デュオは赤いレーザーの光がひとつであることから犯人は単独犯である可能性が高いとふみ、デュオに一人残された白薔薇のお嬢様の元へ赤薔薇のお嬢様を連れて走る。もちろん、逃げるため、三十秒後には彼らの姿はパーティーホールに無かつた。

デュオは犯人の姿を確認した。二人組みだった。スナイパーライフルを操る者と、指示を出す者。彼もまた飛び道具を持っていた。デュオは一か八か。指示を出す男の背後から近づき、彼の首を絞める。視床下部を瞬時にして刺激された男は気絶し、その場へ倒れこむ。もちろんその緊急事態に黙っているスナイパーではない。腰から銃を取り出すと闇雲に弾を撃つ。

その音はディオの耳にも届いていた。彼はどうしてもデュオが気になった。ただ、死なないでくれ。そんな思いで塔を昇る。

デュオは数えていた。「いち、にい、さん……」それは犯人が乱砲する弾の数であり、先ほどリロードをしたから八発打てばまたリロードする。リロードには約十秒かかり、その間は安全だということも知った。「ろく、なな……」。あと一発。彼はきゅっと足に力を入れる。その時だった。

「デュオ！」

ディオが犯人の目の前に。犯人の標準がディオに向いたことが分かった。デュオはとっさに指示を出していた男の持っていた銃を拾う。いくら暗闇とはいえ、この至近距離ではずさない者はいない。まして相手はスナイパー。銃撃のプロだ。弾も残り一発。十分惨劇が起こるには相応しい舞台が整っていた。

この日最後の銃声がこの辺り一帯を包んだ。倒れているのは、ディオでもデュオでもない。スナイパー。スナイパーは右手を押さえ突き声を発していた。ディオは、あの一瞬でスナイパーの右手を打ち抜いていた。それはスナイパーが引き金を引くほんの前だった。

ディオは今、何が起きているのかわからなかった。手際よく犯人をロープで縛り、銃を取り上げるデュオを見つめる。

まさか。白薔薇のお嬢様を守るだけではなく犯人まで殺さずに確保するとは……。あなたはもうすでに私の上に行く執事ですよ。

ディオはそんなことを思いながら階段を下りた。デュオに、借りができてしまったな。

翌日のことである。ディオが朝目覚めるとディオが荷物をまとめ出て行くこうとしているところだった。特別ディオが起きるのが遅かったわけではない。実際今は午前六時前。デュオが早すぎるのだ。デュオはディオに気がつくと、

「本当は気付かれないように出て行くこうかと思ったのだが」

ディオは笑った。デュオはそれが不思議でたまらなかつた。もしかしたら自分がいなくなるからうれしくて笑っているのか？ そうも考えたほどだ。

「今からピクニックですか？ まったく、何日野宿する気ですか。あなたには『執事』という仕事があるでしょうに」

デュオはディオを見つめた。え？ 今なんて？ そんな表情だ。

「そうそう、この紙、あなたの名前を書いてくれませんか？」

ディオがペンと一枚の紙をデュオに手渡す。それはいつしかデュオが渡した『義兄弟契書』だった。

- C i e c c o - (後書き)

どうも、雑文物書きの宝栄光です。

あとがきって言っても何も書くことが無い…んー、あ、もうすぐバレンタインデスねー。宝栄光はチョココレートを貰えるのでしょうか？

チョココレートはやっぱりロイズのチョココレート。

そうそう、イラストレーターの方と夢奏小瓶というサークルを立ち上げました。よろしければそちらもご覧いただければ幸いです。

それでは、次回お会いしましょう！

2010年02月01日 夢奏小瓶：宝栄光

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1832i/>

Rose Garden

2010年10月9日06時39分発行